

## 「神奈川震災100年プロジェクト」の展望

平塚市博物館 学芸担当 野崎 篤

### はじめに

神奈川県内の各博物館園では、関東大震災から100年となる令和5年度に、関東大震災あるいは自然現象としての大正関東地震にスポットをあてた展示企画がそれぞれ独自に催された。神奈川県博物館協会（以下県博協）加盟19館園で立ち上げられ、令和5年を通して活動した「神奈川震災100年プロジェクト」（以下本プロジェクト）では、関東大震災から100年目の節目に関わる県博協加盟館園の企画について、紙媒体やWEBサイトでの広報活動を中心とした相互協力を実施するとともに、県博協の令和5年度を「県博協防災Year」と位置づけ、博物館防災をテーマとした加盟館園向け研修会やシンポジウムなどを実施した。

本論では、プロジェクト全体を振り返りながら、今後の展望についても論じる。なお、事業内容の詳細については、本紙の吉田（2025）を参照されたい。

### 「神奈川震災プロジェクト」の特色と狙い

神奈川震災プロジェクトの特色は、分野をまたいだ相互連携を県博協に加盟する複数の館園間で実施して、一般への周知を狙ったことといえよう。そもそも博物館は、複数分野の専門家が相互連携を行う場として機能するポテンシャルを持つ。中でも自然災害に関する話題は自然現象としての側面に着目するか、人間社会への被害に着目するか、という異なる大きな切り口から様々なアプローチが可能であり、博物館においては自然・人文両分野をまたいだテーマとしてうってつけである。自然災害という一人一人の生活に密着したテーマに関わる情報を、博物館が主導で発信できるようになることは、今後の社会における博物館の立ち位置にとっても重要であると思われる。

その点で、震源である相模湾に面し、神奈川県内の被害が極めて大きかった大正関東地震および関東大震災は、神奈川県博協に加盟するほとんどの博物館園にとって重要なテーマであろう。実際

に、関東大震災から70年、80年、90年といった節目には、県内の多くの加盟館園で展示企画が行われている。以上を踏まえたうえで、本プロジェクトではフィールド、分野、立ち位置が異なる県内の様々な博物館園で独自に積み重ねてきた成果を、県博協のネットワークを生かして一般により広く周知することを狙って、チラシ配布、HPでの周知、ぼうさいこくたい2024でのポスター展示などを行った。また、2024年3月9日には「関東大震災100年の成果と課題—神奈川県の博物館から—」として、県博協主催の一般向け講演会も実施した。

特色のもう一点は、博物館防災にも軸足を置いた点である。県博協では2015年に総合防災計画を策定するなど、博物館資料を災害から守るため、加盟館園が相互に協力する体制を整えてきた。加えて、2019年10月の台風19号（東日本台風）による川崎市市民ミュージアムの浸水被害を受けて、文化財レスキューを継続的に実施してきた。一方で、例年実施している防災訓練への参加館園は一部の特定館園のみにとどまっている状況が長く続いていた。これらを踏まえ、本プロジェクトでは博物館防災に関わる講演会、神奈川県立歴史博物館における避難訓練、情報伝達訓練を通して、各館の防災意識向上や災害対策に係る知見の共有をも狙った。

### 「神奈川震災プロジェクト」の振り返りと展望

関東大震災は関東一円に大きな被害をもたらした大災害であり、その被害の程度や要因は地域の特性によってそれぞれ異なっていることから、地域ごとの被害の様子を地域で保存し公開したり研究に資したりすることは、各々の地域における防災上の観点からも極めて重要である。関東大震災をテーマとした企画展を県立レベルの博物館のみならず、県下の20以上もの博物館園で催すことができていることは、各館が県内各地域でそれぞれ独自に博物館としての本質的な活動を継続してき

たことの表れといえるだろう。本プロジェクトは、神奈川県内の各博物館における活発な活動の様子を県内外に周知するために貢献した。各館でチラシを手を取った来館者からは、県内にこれだけの博物館が活発に活動していることを初めて知ったという声や、全館を回りたいという声も見受けられた。

本プロジェクトの参加館園は最終的に21館と、全加盟館園の2割となった。このうち、ミニ展示を除く企画展示は17館であったが、いずれも災害としての側面から被害や復興にスポットを当てた人文分野の展示で、自然分野に重きを置いた展示はごくわずかであった。これは学際分野でも顕著で、地震学会や地質学会においても、“大正関東地震”から100年をテーマにした学会主導のイベントは数える程度しか行われなかった。これは逆に関東大震災を含めた大正関東地震に興味を持つ一般の人々に対して博物館主体で自然・人文両分野からのアプローチができる良い機会であったし、実際本プロジェクトでの広報活動によりその役割は一定程度果たせたといえるだろう。

また、各館の学芸員が県博協を通して他館と連携して、共通テーマに沿った企画や研究を実施するための新たな下地ができたことも成果であろう。企画に参加した館の学芸員からは、震災に関する他館の展示や資料状況を知るきっかけになったという声もあった。専門の学芸員でも認知していなかった他館所蔵の新たな資料の掘り起こしがあれば、それらを基にした研究を経て新たな知見の獲得、ひいては地域資料と博物館の新たな価値の創出へと繋がることも期待される。県博協が、分野を跨いだ各館の研究成果のアピールのために広報を行ったり、研修会などを通して加盟館園間で情報を共有する場をつくったり、といった形で役割を果たすことは、加盟館にとって大きなメリットになりうる。

一方で、県博協の年間事業の一環として実施した行事を除く、本プロジェクト独自の企画は、各館それぞれでの企画を広報することが中心となり、企画内容そのものについて各館で連携するまでに

は至らなかった。展示企画の立案から決定までの期間とプロセスは館園毎に大きく異なることを鑑みても、本プロジェクトの企画が県博協幹事会として正式に議題に上がったのは2023年の11月頃であり、実施までは極めて短期間であったことが要因として挙げられる。例えば展示企画について、自然・人文両分野を絡めたような視点で、かつ複数館の共同でまたいで実施するというような連携事業の実施には、少なくとも2～3年以上の準備期間を見積もっておくことが求められるだろう。

また本プロジェクトでは県博協の活動を軸にしたこともあり、加盟館園の学芸員対象の企画が中心で、一般の方を主たる対象とした行事は企画していながらも実現できなかった点が課題として残る。博物館資料を災害から守る重要性を訴えることは博物館として極めて重要であるが、その重要性が必ずしも多くの市民に認知されているとはいえない。しかし、災害について学術的な側面での情報収集と発信といった役割を博物館が少なからず担っていることを周知することは、博物館の社会的な価値を高めることに繋がると期待される。災害をテーマに、市民へ博物館の社会的役割を、講演会や観察会などの行事を通してより広く周知することは、博物館資料の保存について一般に理解を深めてもらう一助にもなると期待される。今後の災害をテーマとした連携企画ではより一般向けの内容を、複数の館園が連携していることの強みを生かした形で実施されることが望ましい。

## おわりに

課題はあれど、神奈川県内の博物館園が共通のテーマについて、専門分野をも跨ぎながら、相互に連携できたことは、全国的にも稀有な事例と言って良いのではないかと。県博協では年間事業として講演会などを例年実施しており、今回のプロジェクトをその一環として実施できたことは大きい。今後は災害史にとどまらず他分野間共同での連携企画や研究を、神奈川県はもちろん県をも超えることも視野に入れて、県博協をハブとして博物館主体で担っていくようになることを期待したい。